

in full bloom

アナログ表現の可能性について

芸術研究科 造形表現専攻
芸術表現領域 博士前期課程
2025年3月修了

古賀 有利子

主査 渡抜 亮 副査 Robert David Platt 国本 泰英

研究背景

大学3年生より、グリッチ加工を初めとしたデジタル的な視覚効果や正確さ、端正さをアナログ絵画によって表現できることに気づき、アナログ絵画に無限の可能性を感じたことから、大学院でも研究した。

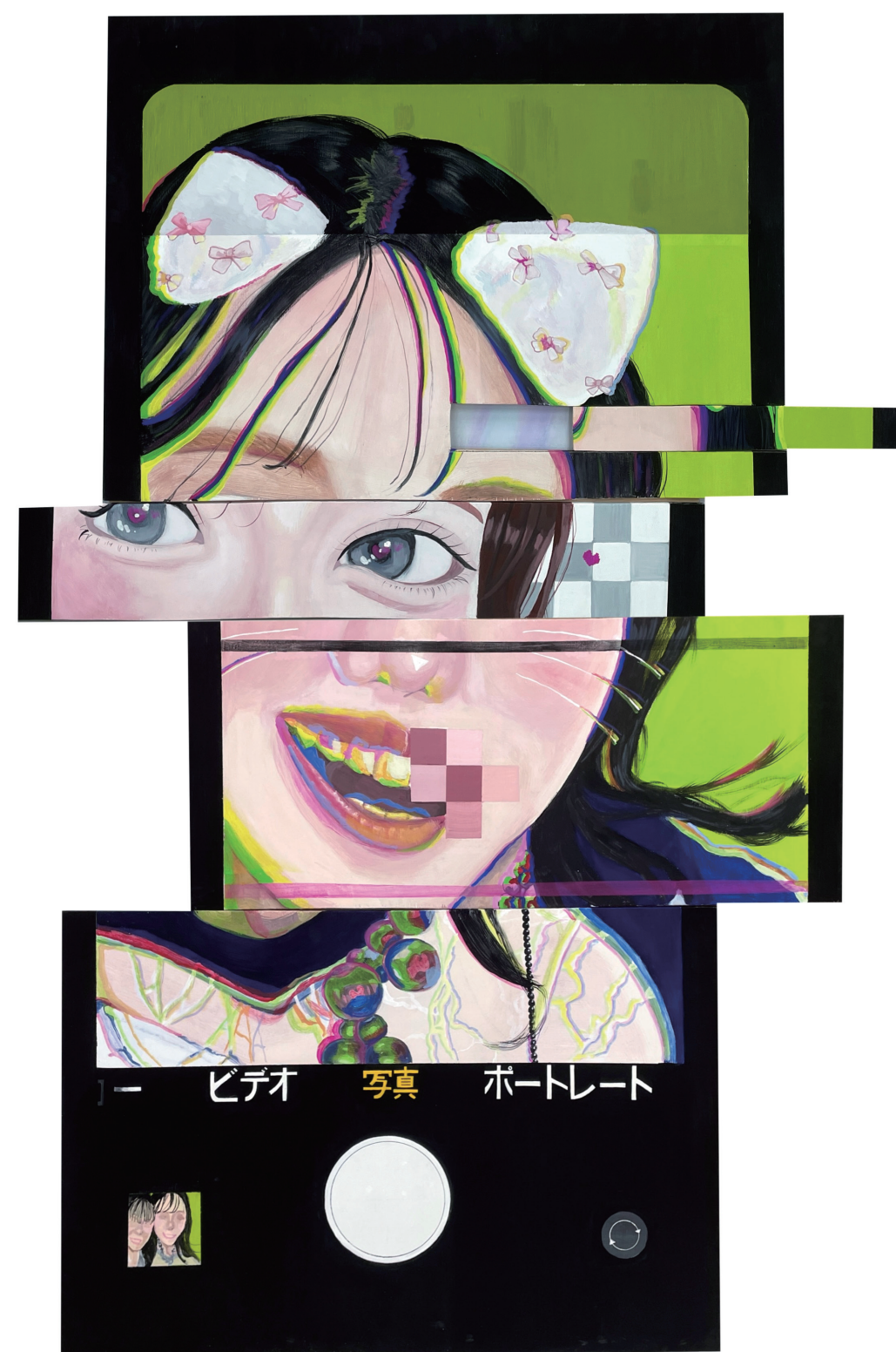
ここにおけるアナログは「数値化できないもの・現実」、デジタルはパソコンやスマートフォンの画面内にあるような「数値化できるもの・仮想」とする。

研究目的

この研究では主に「アナログ技法」の継承や発展を目的としている。

写真やテクノロジーの発達した現代において、必要性や意味合いの薄れたアナログ技法や絵画の特有の趣を深く追求し、年齢や性別など問わず多くの人々に私の作品を見てもらい、興味を持ってもらうことで、歴史の長く伝統的なアナログ絵画をこれからも後世に受け継いでいきたい。

研究概要



成果・まとめ

作品上でメインとして扱っている“グリッチ”とは、2000年代においてポピュラーなデジタル上のエラー現象であったが、更なる技術が進歩した現在では、加工やフィルターとしての立ち位置である事が多く、私が作品上で扱うグリッチも同様に、加工やフィルターとしての意味合いを持っている。

また、2000年代は私が生まれ、幼少期を過ごして深く記憶に残っている時期のため、私の人格を形成した一部や象徴として認識している。



指導教員コメント

古賀さんの自身をモデルにした作品は、人間が自らを映すことと描くことの限らない可能性を想起させる。学部での卒業制作時から一貫した自画像作品は、この2年間で作品表現力がさらに増した。作品は時代によってとらえ方が変わり、グリッジなど画像加工の強調効果の定義が今後どのような意味を持ってくるか楽しみである。有機的なオブジェが追加され物質感が強調された、2点違う視点での自画像観が表現されており、古賀さんが2年間で取り組んできた成果がうかがえる。

渡抜 亮